

## 第13回ノーバディズ・パーフェクト・プログラム 事前講習会

田磨 亜希<sup>1)</sup>

### はじめに

本学では、教育活動そのものが地域貢献となる学校をめざそうという活動に取り組んでいる。2018年度で12回目の開催となったノーバディズ・パーフェクト・プログラム（以下、NPプログラムと略記）は、そのような活動の一環として実施されている。

NPプログラムは、0歳から5歳までの子どもを持つ親のためのプログラムであり、必ず託児をつけることが条件となっている。これは、プログラム参加者である親が体験を通した学びのプログラムに安心して参加することができる環境の提供が重要だからである。つまり、参加者の安心を確保するためには、プログラムの内容と同等に託児が重要な意味を持つことになる。

NPプログラムに学生が託児者として参加することの意義は、①学生が社会に貢献する基礎力を身に付けていく②日頃、関わることの少ない乳幼児期の子どもたちとのふれあいを通して、発達過程を体感するとともに、乳幼児育児への興味・関心を高める③対人援助の実践活動についてのノウハウを学ぶということである。学生が安心して託児を行い、それを成果につなげていくために、NPプログラムファシリテーターの金子留里先生・濱田さつき先生と「海田子育て支援サークル くすくす」から講師をお招きして、事前講習会を実施した。

### 【NPプログラム事前講習会】

#### 1. 実施概要

第13回 NP プログラム

(1) 日 時：2019年10月2日 9:00～11:30

(2) 場 所：心理教育相談センター

2F演習室・1Fプレイルーム

(3) 講 師：(敬称略)

【NP プログラムファシリテーター】

金子留里・濱田さつき

【海田子育て支援サークル くすくす】

森本伸子・井上美和・山口知美・加茂美由紀

(4) 参加者：(敬称略)

【学生スタッフ】

江本友梨佳・大瀧光幸・大畑楓奈・岡田未唯・小松真実・斉藤菜々・砂田梨沙・袖山愛菜・中木綺乃・濱田理緒・藤谷彩花・森杉亜梨・屋地有紗・山下日奈子・吉迫愛恵・渡邊有里・石原麻裕・日野彩香

【運営スタッフ】

植田智・住岡恭子・平原明日香・田磨亜希

## 2. 実施内容

### (1) NP プログラムの概要と目的

NP プログラムは、1980年代カナダではじまったプログラムであり、2002年より日本でも実施されはじめた。日本でのNPプログラムは0歳から5歳の子どもを持つすべての親が対象となっている。現在の日本では、核家族化が進み、わが子を産んで初めて子どもと接するという親や身近に子育てについて話をする人がいない親も多い。そのような状況の中で、書籍やインターネットなどの情報の影響を強く受け、子育てに完璧を求め、不安が大きくなってしまふ親が少なくない。NPプログラムは、「誰も完璧な人などいない」という言葉のもと、参加者がそれぞれに抱えている悩みや関心のあることをグループで話し合いながら、自分にあった子育ての仕方を学ぶ。

プログラムは、全8回を通して参加者のニーズ

1) 広島文教女子大学人間科学部心理学科

や関心に添って、ファシリテーターが計画し、学習活動やグループでの話し合いを進行する。NPプログラムの目的のひとつは、親同士が互いに体験や不安を共有することによって、すでに持っている子育てのスキルを高めたり、新たなスキルを習得し、練習することである。さらに、グループワークを通して自分の長所や能力に気が付き、親としての自信をつける、学習しながら子育て仲間を作り、息抜きとなる楽しい時間を過ごすという精神的な面の充実をはかることも目的としてあげられる。NPプログラムの終わりが親たちの関係づくりのスタートともいえ、親同士のつながりを深め、サポートし合える関係を作るのが役割といえる。

## (2) NPプログラムにおける託児の意味

参加者が子どもと離れることによって、参加者は集中してプログラムに参加できるとともに、新しい人間関係を持つことができる。子どもにとっても親から離れ、新しい信頼できる大人と出会うということは、重要な経験になる。託児者と子どもが安心できる良い関係を作っていくことは、参加者が安心してプログラムに参加できることにつながり、参加者のNPプログラムへの信頼にもつながっている。このことから、ファシリテーターと託児者はNPプログラムの両輪といえる。親は託児で気になることがあれば、ファシリテーターに伝えることができる。

## (3) 託児事前講習会

### ① 自己紹介（アイスブレイク）

まず、講習会参加者一人一人が名前のほかに呼んでほしいニックネーム、今はまっていること、今回学びたいことを発表した。学生からは、2ヵ月間の子どもの成長の変化への対応や親対応についてなどの抱負が述べられた。講師のリードによって、和やかな雰囲気です託児事前講習会が始まり、その後のグループワークでの活発な意見交換につながった。

### ② 託児ルーム見学

次に、託児業務を行う際の注意点等をイメージしやすいように、実際に託児を行う部屋の見学を行った。学生からは、「実際に部屋を見ながら危険

箇所の確認ができたので、託児場面がイメージしやすかった」という感想があがった。

### ③ 乳幼児期の発達と危険について

その後、研修室に戻り、参加者はグループに分かれて、子どもの年齢・月齢に合わせた発達を確認した。年齢・月齢の年表を利用し、乳幼児の心身の発達特徴をグループで話し合っ、付箋に書き出し発表した。続けて、同様の形式で、このころの乳幼児にはどんな事故が起こりやすいかを付箋に書き出し発表した。学生たちは自らの経験や大学の講義で学んできたことをもとに、積極的に意見を交換していた。その後、講師から、育児経験者ならではのエピソードを交えながら解説が行われた。約2ヵ月間という期間に乳幼児は目覚ましく成長していく。出来る事が多くなるという事は、安全の上で気を付けることも変化していくことを理解していった。

### ④ 託児業務と注意事項の確認

託児業務の確認を時系列で行った。まず、託児者の身支度、託児室の準備を行う。受け入れ前にミーティングを行い、連絡事項を確認した後、託児の受け入れが始まる。受け入れの際には、記名を確認しながら持ち物を受け取る。そして、連絡カードで食事や排便の状況をチェックしながら、当日朝の子どもの様子や数日中の家庭での様子を親から聞きとる。託児終了の時刻が近づいてきたら、連絡カードに子どもの様子を記入し、身支度や荷物を準備しておく。子どもと一緒に親を迎え、親に託児中の様子を伝える。託児室を片付け、最後にミーティングを行う。

親が託児者に子どもを預け、安心してプログラムに参加するには、託児者と親の信頼関係が欠かせない。託児受け入れの際と帰りの見送りの際の託児者と親とのコミュニケーションが信頼関係を築く上で重要な機会となる。講師が所属している“海田子育て支援サークル くすくす”が過去に携さわった託児のアンケートを参照しながら、学生たちは、託児に子どもを預ける親の気持ちについてグループで話し合い発表した。子どもや親が気持ちよく参加できるよう、明るく元氣なあいさつを心掛けたり、帰りの際には、託児中の子どもの

様子を伝えたり、親にプログラムの感想をたずねたりすることによって、コミュニケーションをとっていくことを学んだ。

また、子どもに関しては、託児を初めて経験するという子どもも少なくないため、親を送り出す際には、激しく泣く子どももいること、子どもの不安な気持ちに寄り添いながら託児をすることやおむつ替えや汗をかいたときの対応についても細やかにご指導いただいた。

業務確認を終えた後、講師がそれぞれ、親役、託児者役となり、託児の受け入れと送り出しの様子をロールプレイして見せ、学生たちは託児の流れをつかんでいった。

#### ④ 乳幼児とのかかわり方

赤ちゃん人形を使用し、赤ちゃんを抱っこする練習を行った。学生たちが練習に取りかかる前に、講師による実演が行われた。設定では、まず、赤ちゃんにミルクをあげ、飲んだ後に空気が入ってしまうのでげっぷをさせるというものだった。講師の実演後、学生たちはそれに倣うように赤ちゃん人形を抱っこし、げっぷをさせる練習を行った。

#### ⑤ 託児体験で大切にしたいこと

講師より、参加者が安心してプログラムに参加できるように、託児者は大きく分けて三つのことに気をつけていく必要があることが説明された。まず、一つめは“安全”である。ケガ・事故がないことが最も大切であり、危なそうなときは子どもから必ず目を離さない、どうしても目を離さないといけない時は、近くにいるスタッフに必ず声をかけ、協力を仰ぐことが大切である。また、二つめは“安心”である。笑顔で楽しく託児を行うことが、親にとっても安心につながる。親・子どもの気持ちに寄り添い、楽しく時間が過ぎせるよう、子どもの目線に立ち、一緒に遊び・学ぶことが大切である。そして、三つめは“適切な対応”である。子どもは親と離れるとき、泣いてしまうことが多いが、託児は一人でするわけではないので、困ったときは抱え込まず、誰かに相談する。

プログラムは託児スタッフ・NPプログラムファ

シリテーターのみんなで行う。お互い声を掛け合い、プログラムをよりよいものにしていくことが大切であると学生たちに説明された。

#### おわりに

子どもを預ける親や初めて親から離れる子どもの目線になって考え、託児者としてどう振る舞うべきかを考える機会となった。また、グループワークを通じて、学生同士の連帯感が生まれ、実際の託児の際にもお互いを信頼し、協力し合える関係性の土台となった。さらに、共通の注意事項を確認できたことで、チームとして安心して仲間を信頼し、託児に臨める場になったと考える。

事前講習会後の学生からは、「多くの保護者が子どもを預けることに罪悪感や不安を感じていることに驚いた。」という感想が非常に多く、「保護者が安心できるように、託児室での出来事を正直に伝えるときともに、子どもの輝いた瞬間も伝えていきたい。」というような感想があがった。

1回目の託児では、親と離れて激しく泣く子どもに対して、不安な気持ちを抱えていた学生たちが、2ヵ月間の託児の中で、子どもの個性を捉え、それぞれに工夫した対応を行っていた。さらに後半では、より広い視野が持てるようになり、仲間と協力しながら担当の子どもだけでなくほかの子どもと遊ぶ姿も見られた。また、親からも安心して任せているといった声をかけてもらい、自信につながっていったことは、事前講習会での学びなしでは達成されなかったと考える。

学生たちはこの度の託児を通して、乳幼児の託児についてだけでなく、子どもの成長には個性があることや親の子どもに対する想い、周りの人と協力して子育てしていくことを学び、体験したと感じる。

子ども達の様子に目を配るだけでなく、学生一人一人に心を配り、学生たちの不安な気持ちに寄り添い、丁寧にご指導くださった“海田子育て支援サークル くすくす”のスタッフの方々に厚くお礼を申し上げたい。学生たちにとって、くすくすの皆さんから頂いた温かいご指導・ご支援は、今後の社会生活で大きな支えとなると考える。